

堀田あけみ

*Akemi Hotta*



思い出させてあげよう

作家・イラストレーターの先生への  
ファンレター・感想・ご意見などは  
〒101東京都千代田区西神田3の6の4  
白泉社書籍編集部  
気付でお送りください。  
編集部へのご意見・ご希望なども  
お待ちしております。

想い出させてあげよう

一九九五年三月三〇日 初版第一刷発行

著者——堀田あけみ

発行人——麻木正美

発行所——株式会社 白泉社

東京都千代田区西神田三―六―四

電話・編集部〇三―三二六五―一九九七

販売部〇三―三二六五―一九一九

印刷所——大日本印刷株式会社

装丁——大向務（株式会社アノン）

©1995 AKEMI HOTTA. Printed in Japan

ISBN4-592-86130-2 C0293

落丁・乱丁の本はおとりかえいたします。

無断で複写複製することは、法律で禁じられています。  
定価はカバーに表示してあります。

# 思い出させてあげよう

---

堀田あけみ





ますみ



はなえ  
花江さん



まさと  
万里



きぬ こせんせい  
絹子先生



こうすけ  
広介



たけひと  
剛仁

カバ  
ー  
イ  
ラ  
ス  
ト  
河  
南  
図  
ら

## 目次

|   |               |     |
|---|---------------|-----|
| 1 | なりきれないナルシス    | 10  |
| 2 | たったそれだけの大問題   | 50  |
| 3 | 言葉は器用 気持ちは不器用 | 75  |
| 4 | 少女の受難 少年の災難   | 147 |
| 5 | 母も少女である為に     | 207 |
| 6 | 思い出させてあげよう    | 240 |

主な登場人物



あすこ  
安寿子



りん  
凛



いつべい  
一平



まい  
舞



思い出させてあげよう

堀田あけみ



私は何かになる。私は、それだけを知っていた。

どうやってなるかは知らない。

その前に何になるかさえわからない。

とにかく何かになるのだと。今の私は、まだ何でもないのだから。

けれど、昨日までの怖いもの知らずが、ある日ふと恐怖を感じた。

どうしよう。もしも何にもなれなかったら。十年経っても、まだ何でもない私がいたら。

その恐怖を大人の印だと誰かが言った。いいことだと言った。そんなもの。

糞喰らえ。

# 1 なりきれないナルシス

世の中のものを、二つに分けるのは簡単だ。

すべては、ある集合をAとしたら、残りをAでないものとする。ベン図を描けばわかるだろう。ベン図がわからない人は、中学校の数学をやり直すか待つかしなさい。

悩みを基準にしてみよう。人は容易に二分できる。悩みを持つ人と持たない人。

更に、悩みを持たない人を二分してみる。それは、こういう簡単な方法は使わずに。

一つは、いわゆる莫迦<sup>ばか</sup>。

あんな、悩みなんて無いんでしょと言われてしまうタイプ。

もう一つは。

自分がこの人だったら絶対に悩みなんか持たないだろうかと、誰もが思ってしまうような人。

天馬安寿子<sup>てんまやすこ</sup>は美人である。身長百七十二センチ、体重六十七キロ。と言うと皆が驚くよ

うな体型である。身体のひとつが筋肉で占められている為に、見た目より重いのと、胸やお尻、太腿にしっかり肉がついているせいもあるだろう。女性として望み得る限りの美しいプロポーションではある。その恵まれた体を駆使して、グラウンドを動き回る姿に、一度も目を止めた経験が無い者は、教師・生徒から用務員の小父さんに至るまで、一人もいないと断言していい。この二年と少し、県内の陸上競技大会の高跳びでは、上位に必ず食い込んできた。足もいいが性格もいい。但し、さっぱりし過ぎているのが、ときとして敵を作る。しかし、さっぱりし過ぎているくらいなので、本人は気にしない。唯一、他人から抜きん出ていないのは学業だが、それだって中より下ではない。

自分が彼女だったら悩まない、と思わない人の方が例外だ。人間が望み得る、ほとんどすべてを持っているのだもの。それも大方生来的に。幼馴染みの岩原舞などは、物心ついてから、保育園に始まって高校まで同じところへ通った十数年の間に、何度言ったか知れない。私も安寿子ちゃんみたいだったらいいのに。安寿子ちゃんが羨ましいな。

安寿子自身も、自分が嫌いではない。極力客観的に自分を見て、体型に恵まれていると思っているし、性格もいいと思う。物心ついたときから、放っておいても他人より高く跳び、速く走る足を授かったこともラッキーだと思っている。てんで冴えない女の子でいる

よりは、天馬安寿子でいる方が楽しいに決まってる。

しかし、舞あたりの女の子から、何度もそう言われてしまうと、案外嫌みいやにも感じられるもので。本人に悪気が無いのがわかっているだけに、嫌みと決めつけることもできず、切ないものである。

私だって、舞ちゃんみたいに、可愛くて大人しくて女らしくて、守ってあげたくなるような女の子に生まれたいって思ったことあるよ。

それが、安寿子の本音である。「ことあるよ」と言う通り、常に思っているわけではない。生まれ変わるとしたら、冴えない女の子なんか絶対ごめんだが、舞のように、愛くらしいと言えそうなタイプならいいな、と思う。人生が二回あるなら、一回はこの天馬安寿子の人生をやって、もう一回は、ああいうタイプでもいいなと。

もちろん口に出しては言わない。プライドが許さないと言うより、周りの人々が天馬安寿子に、他人を羨んだりしない人物像を求めていることを知っているからである。

しかし、舞のようなタイプの方が、確実に男にはもてる。舞にはファンなどというものはおらず、好きになったら直接近付いて来る男達だけがいる。安寿子は三桁にものぼるかもしれないファンを校内にも、校外にも抱えているが、彼女を恋人にしたいと真剣に考え

ている人間は、二桁は行かないだろう。性別を考慮しなければ、二桁に行くかもしれないが、心情的に、安寿子は考慮したくない。そして、好きになっても誰もモーションなんかかけて来ないだろうなという自覚も、十八年も生きてりや出て来る。これだけ騒がれたり、自意識過剰でなく、熱っぽい目で見つめられたりしているのに、誰も何も言って来た試しが無いんだもの。

それに、世界中の人から惚れられたって、こっちから惚れたたった一人の人にそっぽを向かれたら何の意味も無いのは、言うまでも無いことで。

事実を簡潔に述べれば、天馬安寿子が惚れているたった一人の男は、岩原舞の恋人であった。

実は、「恋人」の定義の裏にも複雑な事情があり、話は一層ややこしくなる。安寿子が惚れている、鬼奴おにんどいっべい一平という男は、いろいろと変わり者である。「いろいろ」の一つに、恋人という呼称を認めない、というのが入る。事実が恋人であっても、恋人とは呼ばない、定義しない、というのである。

結婚には、法律に則って入籍する法律婚と、法律はさておき夫婦として存在していることを重視する事実婚とがあるが、これを恋人という関係にこのまま移そうと思ったら何と

言えば良いのか。宣言することが大切である宣言恋人と、どう呼ぶかはさておき恋人として存在していることを重視する事実恋人とでも言えばいいのだろうか。

つまり、事実は恋人だが、一平はその呼称を使わないし、そうなると当然舞も使わない。周囲が使うのも野暮というものである。しかし、くどいようだが事実は恋人。

となるのだった。

安寿子は、自分の欲しいものは必ず手に入れた。以前は、入れると断言していたものだが、最近それができなくなった。

一平が手に入らなかったから。

選りにも選って、舞の手に入ってしまった。いつも安寿子の後ろから、憧れに満ちた目差しを投げかけながら、ついて来た舞の手に。

やめんか、その「手に入る」っちゅう言い方は。安寿子の心が見えていたら、一平はそう言って怒るだろう。そういう考え方が嫌やから、恋人なんて言葉、使わへんのやないか。俺は、誰の手にも入れられたいし、誰を手に入れたいとも思わん。言葉で縛ってしまうと、純粋な好きという感情が、いきなり契約的なものになってしまうから。

安寿子は、心が近くなれない分、物理的に近くなろうと、一平に抱きついたりしている。



「一平くん、大好き」

って。一平は迷惑そうにしているが、ほんの少しだけど、どっか喜んでる、と安寿子は自惚れている。舞もその行動は認めている。

舞には、これがカムフラージュだと言ってあるからだ。舞には、安寿子が本当に好きなのは、一平の親友の林<sup>はやしりん</sup>凜だと言っている。

そして、そこまで大っぴらに、好き好きと連発してしまうと、周囲も本気ではないだろうと思ってしまうのだ。

安寿子が本当に、一人になると泣いてしまうくらい一平が好きだなんて、誰も想像できないだろう。

あ、ちよつと想像してるのは、いるかもしれない。これも一平の一派の折野<sup>かしのこうすけ</sup>広介は、考え深い上に勘までいい。眼鏡の向こうに、何でも見通してしまいそうな目を持っているから。だから、ときどき目を合わせたなくなる。でも多分、広介も舞に惚れていると思う。だから、おあいこかな。しかし、だからと言って事態は、少しも良い方には向かないのだった。

こんな状況では、悩みが無いどころではないでしょう。それも、随分と格好の悪い悩み